

LORC 2006年2月スケジュール

- 13～15日(月～水) 熊本市職員研修(教育・研修システムWG担当)
- 時 間: 13:30～16:30(15日は13:30～17:30)
- 会 場: 熊本市営駐輪場8階 大会議室
- 議 題: 「子どもの問題を切り口に地域づくりを考える」(仮題)
「高齢者の問題を切り口に地域づくりを考える」(仮題)

* 熊本市職員研修については、下記 RA 報告および RA 田村 (tamura@ryukoku-u.jp) まで

研究班及びWG活動報告

第1班 RA 辻本 乃理子

1月14日(土)第2回研究会および第1班と地域公共人材像WGとの合同研究会を同時に開催しました。ここでは、研究員の異動、今年度の今後の計画、来年度の計画、について班代表より報告がありました。については、新研究員2名の紹介と元ニセコ町長逢坂氏の研究員辞退が報告されました。については、シンポジウム・研究会、3冊のブックレット発刊予定、三重県のプロジェクサポートのその後の動向の3点について報告されました。

については、海外調査2件の予定、東京農工大COEとの連携プロジェクト、政策デザインWGとの連携、出版計画が報告されました。

次回研究会は3月18日(土)に、第4班、地域公共人材像WGとの合同で開催の予定となっております。開催場所等詳細が決定次第ご連絡させていただきます。

第2班 RA 田村 瞳

12月24日に第六回研究会を開催した。ここでは、前回からの継続協議である、公共性と公益のかかわり、2005年度の研究成果の取りまとめ、その他(シンポジウム、翌年度の研究会)に関する議論が行われた。まず、の議論に関しては最初に3班の提言書のバックグラウンドとして議論をまとめることが確認された。そして、前回から試行されている公・共・私各セクターの図式化における議論が展開されたが、前回と同様議論の集約には至らず、今後はメーリングリストで意見交換をしながらまとめていくことで合意した。につい

ては、基本的に例年通りの年次報告書(総括、研究会内容、シンポジウム及び講演会等)としてまとめることで合意した。また、各研究員の個人的事業は各自報告書にまとめて提出してもらうことになった。の翌年度の研究会については、今年度と同様程度の開催を予定し、今年度の初回に決定された方針通り国内外の教育システムの現状を踏まえ、LORCが提唱する「地域公共人材」の構築に向けてのシステムづくりのベースを、a)大学における具体的なプログラムのあり方、b)大学、大学院においてどのように実施していくか c)大学と自治体の研修機関の関係、の視点から検討していくことが確認された。また、1月21日に第七回研究会として、国際シンポジウムの海外招聘者であるパーミンガム市役所経営開発センター課長のRichard Billingham氏による、同市で実施されている研修の内容及び人の開発に関するプレゼンテーションがキャンパスプラザ京都で開催された。

第3班 RA 田村 瞳

* 第3班は現在実質的な研究活動は行っておりませんが、昨年度から継続の活動が多少残っておりますので、昨年度担当RAの田村より報告を致します。

今月は特に報告する活動はありません。

第4班 RA 新井 健一郎

アジア・アフリカ4カ国における研修プログラム・機関サーベイは、年度末の報告書完成へ向けて各国で担当者が引き続き調査にあたっている。2007年に出版予定

の書籍、'Foundations for Local Governance: Decentralization in Comparative Perspective'(仮題)は、出版計画が概ねまとまり、今後研究や準備を順次進めてゆくこととなる。同書は、構造に対して行為者とその相互関係の重要性を強調するアクター・パースペクティブを用いながら、インド・インドネシア・スリランカ・ウガンダ・南アフリカ・ガーナを対象として分権化の比較研究をおこなうもの。

特定研究WG担当RA 朴 重信

現在、政策デザインWGは高島市プロジェクトを行っており、今年度4月から本格的に乗り出す予定です。4月のスタートに当たって、2月20日(月)に連続的に市民懇談会と高島市プロジェクト事前協議会の2つを同時に開催することになりました。市民懇談会には、市民代表、高島市役所、NPO、龍谷大学LORC(広原盛明教授とRA朴重信)の約10人程度が参加する予定です。高島市プロジェクト事前協議会はマキノ支援センターで行われる予定で、現在高島市の各地域ごとに推進しているまちづくりの取り組みなどを話し合っこれからの高島市プロジェクトと関連づけて協議を行います。2月20日の両行事の事前打ち合わせは随時LORC支援室で開催される予定です。

教育・研修システムWG:

RA 田村 瞳

12月24日に、熊本市研修プログラム試行及び来年度の研修プログラムに関するWGをキャンパスプラザ京都で開催し

た。 に関しては、西田氏と深尾氏から 12 月 20 日に熊本市内で開催された研修運営に関する打ち合わせの説明が行われた。そして、とりわけ評価においてどのように対応するかが議論され、感想及びアンケートをそれぞれの研修後に実施することで合意した。アンケートの内容項目に関しては、前川崎市の研修所副所長であった龍谷大学法学部教授の大矢野先生によるご協力をいただくことになった。今回の熊本研修プログラム試行の成果については、報告書を作

成することが確認された。(具体的には、研修講師が研修のレジュメ作成及び報告書の総括を行い、ファシリテーターは受け持分の報告書を作成する。)

においては、a)府県レベルの研修センターでの協働プログラムと b)個別の市町村レベルの研修センターでの協働プログラムを実施することで合意し、その候補として a においては、滋賀県市町村職員研修センター、b においては寝屋川市が挙げられ今後調整していくことが確認された。

2月1日に熊本市における幹部研修が、午前と午後各2時間半にわたり実施された。(全管理職(課長以上)が対象で、計400人のなか380人の参加があり、同内容の講習を午前と午後に分けて実施。)この研修の講師は、富野先生が務め、受講者からも好評のもと無事終了した。2月13日~15日には、市民協働研修(ワークショップ)を実施する。次回の研究会は、4月15日の予定。

LORC 資料室文献紹介

皆様からも有益な文献・映像資料などの情報をお寄せ下さい。ご協力宜しくお願い致します。

Gray, C. (1994) *Government Beyond the Centre – Sub-National Politics in Britain*, Basingstoke: Macmillan

Sullivan, H. and Skelcher, C. (2002) *Working Across Boundaries – Collaboration in Public Services*, Basingstoke: Palgrave Macmillan

Goss, S. (2001) *Making Local Governance Work – Networks, Relationships and the Management of Change*, Basingstoke: Palgrave Macmillan

Wilson, D. and Game, C. (2002) *Local Government in the United Kingdom (3rd edition)*, Basingstoke: Palgrave Macmillan

雑誌の情報は以下のサイトへ！

ガバナンス

http://www.gyosei.co.jp/book/g_zassi/gover/index_gover.html

日経グローバル

<http://www.nikkei.co.jp/rim/>

掲示板

第 2 班 研究員松浦さと子先生の研究成果をお知らせします！

- 「ドイツ・オープン・チャンネルにおける現状と課題-少数意見表明機会として市民に開かれた放送の 20 年-」 『龍谷紀要』第 27 巻第 1 号 龍谷大学 (p,61-72) 2005.12
- 「ドイツ・オープン・チャンネルの非営利組織による活用状況 -- 視聴率に代わる評価指標を『オープン・チャンネル・ベルリン 2003-2004 年間報告書』に探る --」 『龍谷社会学部紀要』第 28 号 (現在校正中)

先生からは、このほかにも学会などでの口頭発表によるご報告の状況もお知らせ頂いております。松浦先生いつもありがとうございます。

新聞・雑誌などの記事について

新聞、雑誌などにご自分の記事が掲載された時は、ぜひ LORC 支援室的場 (matoba@rnoc.fks.ryukoku.ac.jp) までお知らせ下さい。こちらでも出来るだけピックアップするようにしていますが、すべてをカバーするのは困難ですので、宜しくお願い致します。

LORC 研究員のひとこと (紹介)

今月の研究員紹介はお休みとさせていただきます。次回をお楽しみに。

2006年 LORC 国際シンポジウム：「地方政府主導からマルチパートナーシップへ - 地方分権時代の新たな公共性に対応する人材育成システムの創造 -」が開催されました

去る1月20,21日(金、土)の両日、LORC 国際シンポジウム「地方政府主導からマルチパートナーシップへ - 地方分権時代の新たな公共性に対応する人材育成システムの創造 -」が開催されました。両日とも、自治体職員、NPO スタッフ、一般市民、大学研究者、学生など多様なグループから多くの参加を頂きました。



初日の国際シンポジウムでは、基調講演として、ドイツのライナー・ピチャース教授とイギリスのスティーン・サイレット教授から、それぞれの国におけるローカル・ガバナンスの現状と課題について報告があり、それを踏まえて、フィリピンのNPO代表と南アフリカの研究者、日本の研究者2名、そして基調講演者の2名を加えてパネルディスカッションを行いました。

ドイツでは、80~90年代に比較的安定した地方政治体制が確立していたこともあり、新たなローカル・ガバナンスへの転換が緩やかに行われてきたこと、対照的にイギリスではサッチャー政権以降、かなりドラマティックな(時には強行的な)改革が推進されたことが確認されました。一方、両国ともローカル・ガバナンスの改革に際し、social inclusion(社会的包摂)が sustainable community(持続可能なコミュニティ)を達成する上での具体的な政策課題として設定されているという共通点も見出すことが出来ました。

2日目の教育研修ワークショップでは、国内外10名の大学研究者、自治体首長および職員、NPO関係者、企業代表者に、それぞれの立場から教育研修の現状について

報告して頂きました。

多種多様な発表者が集まったため、統一的な議論として収斂させることはなかなか困難なようでしたが、その中でも共通認識として、ローカル・ガバナンスにおけるパートナーシップは、その地域の歴史的文化的背景や地域固有の課題に対応すべきもので、その意味でパートナーシップを考える際には、多様性、多面性、現場性を確保する必要がある、ということが確認されました。また、これまで地域マネジメントにおいて主要な役割を務めていた地方自治体の役割について、新たなガバナンスの形に対応した新しい役割とはどういったものが、検討する必要があることも議論されました。

今回の国際シンポジウムでは、これまでの、例えば自治体のある部署と特定のNPO団体というような、事業ベースのパートナーシップが一般的であった日本の現状に対し、地域の多種多様な利害関係者の包括的かつ戦略的なパートナーシップが必要であるという見地から、「マルチパートナーシップ」という言葉をキーワードとして設定しました。ただ、今回の報告はすべてそれぞれの国においても先進的な事例であり、マルチパートナーシップおよびローカル・



ガバナンスの実状は必ずしも今回議論されたような望まれた形には至っていません。その意味で、今回のシンポジウムが、これら事例を通してある種の「理想形」を国内外の多様な立場の参加者に提示し、それに関する議論の場を提供することにより、それぞれが抱える現状の問題点の抽出と将来のビジョンを形成する上で少しでもお役



に立てていただければ幸いです。

今回講演頂いた皆様のペーパー、資料などをLORCのウェブサイトへアップロードしておりますので(http://lorc.ryukoku.ac.jp/2006_intsympo.html)興味のある方は是非一度ご覧下さい。



アイランドと私(6) ----- ポストと私

私の物流苦労譚は尽きませんが¹、今回は物流そのものではなく、ポストの話です。

アイランドのポストは緑、シャムロックの色です。シャムロックとは三つ葉のクローバーのことで、キリスト教布教の偉人である聖パトリックが三位一体の教義を説明するために使ったとされ、アイランド共和国の象徴としてもよく使われます。この色は鮮やかな原色ではなく、葉の緑で、国旗の3色のうちの一色でもあります。ダブリンには、日本の昔の円筒型郵便ポストを彷彿とさせる古式ゆかしいシャムロック色のポストが並んでいます。



国立博物館や議会、内閣、政府の建物がならぶキルデア・ストリートにもポストがあります。しかし、ふと、違和感が。大きめのポストにはマークがついているのですが、よく見ると、そのマークが違います。優美に装飾化されたRの文

字に王冠。なんと、英国ロイヤル・メールのマークではありませんか。

アイランド共和国は1921年に英国から事実上の独立をかちとりましたが、それまではポストも赤だったことでしょう²。目抜き通りサックビル・ストリートを独立史の英雄にちなんでオコンネル・ストリートと言い換えても(1924年)、IRAがそのネルソン像を「英国の英雄がダブリンを睥睨するのはけしからん」と爆破しちゃっても(1966年)、赤をシャムロック色に塗り替えても、ロイヤル・メールのマークのポストはずっと立っていたんだなあ、と、しみじみ。しかも、キルデア・ストリートに。貧乏でお金がなかったからか、そこまでは気にしなかったからなのか。

アイリッシュの愛国心の強さや英国嫌いは、司馬遼太郎の『街道をゆく 愛蘭土』(朝日文庫)で切々と書かれています。しかし、こちらにきて気がつくのは、ここが英国文化圏

であるということ。生活様式、商圈、言語。もちろん気質や文化の差異、地域差も大きくありますが、それでもおおまかにみればやはり現代アイランドは英国圏。だからこそ、英国との「違い」を意識し、こだわるようにも見えるところがあります。しかし、1990年代以降のアイランドの経済発展は「英語」で「EU・ユーロ圏」であるところに大きくよっています。英国支配の負荷と遺産、影響と独自性、錯綜する二面性³が「シャムロック色のロイヤル・メール・ポスト」のなかにつままっているような気がします。...しかし、キルデア・ストリートのポストの前でしゃがんでそんなことを考える東洋人ほど、あやしいやつはいませんね!

- 1 ニュズレター11号(2005年5月)でご報告した「再配達システム」は、民間企業への委託だったようですが、昨年秋廃止されてしまいました。何度、小一時間かかる集配局へ行ったことか...
- 2 ちなみに世界で最初に切手を発行し、近代郵便システムをつくった国は英国です。日本にこのシステムを導入したのは英国で学んだ「郵政の父」前島密で、日本のポストが赤なのは英国の影響です。
- 3 このあたりフェイロン(橋本横矩訳)『アイランド 歴史と風土』岩波書店、1997年(底本は1969年)がお勧めです。

編集後記

久々に自分で着物を着て出かけました。記憶をたどり、何とか帯が結び終わった時にはもうくたくた。なんでも継続するが大切と思い知りました。(N)

この間、熊本に行ってきました。京都では雪が降りマフラーと手袋が欠かせない日々ですが、こちらではなんと16度!!!熊本でも久々に暖かい日だったようですが、京都にも早く春が来ないかなあ願う毎日です。(H)遅まきながら、今年もよろしく願いいたします。(K)ますます寒くなっております。お体にご自愛してください。(J)

2006年最初のNewsletterです。少しデザインを変えてみました。来年度は、内容面も再検討する予定ですので、乞うご期待!(T)